

## 第 3 回松本市基幹博物館施設構想策定委員会 会議要旨

- 1 日 時  
平成 28 年 11 月 14 日（月）午後 1 時 30 分～午後 4 時 40 分
- 2 場 所  
松本市立博物館 2 階講堂
- 3 参加委員  
赤羽勝委員、大宮康彦委員、金山喜昭委員、倉澤聡委員、香山壽夫委員、笹本正治委員、南雲多栄子委員、益山代利子委員、武者忠彦委員（50 音順）（欠席委員：菊池健策委員）
- 4 事務局  
教育長、教育部長、博物館長、博物館事業担当課長、都市政策課長ほか
- 5 次第
  - (1) 開会
  - (2) 委員長あいさつ
  - (3) 議題等
    - ア 前回会議集約と補足説明
    - イ テーマ 3 サービス 討議
    - ウ その他
  - (4) 閉会
- 6 会議事項（要旨）

（事務局側の回答要旨は、「→」の後に掲載、委員の発言を受け別の委員が回答したものについては「⇒」の後に掲載している。）

  - (1) 議題アについて
    - ア お城周辺地区まちづくり協議会・歩いてみたい城下町まちづくり連合会が開催したワークショップについて、その様子・提言された内容などについて補足説明があった。（複数委員）
    - イ 約 10 年前に博物館で開催したワークショップについて、その様子・提言された内容などについて補足説明があった。（委員）
    - ウ 今各委員から説明があった各ワークショップの成果は大変重要な資料である。これを踏まえながら議論をしていきたい。（委員）
  - (2) テーマ 3 サービス 討議
    - ア 基本計画の見直し事項について

- ・基本計画を見直し、託児室を設置しないとあるが、その点について再検討いただきたい。未就学児を持つ世代が博物館で勉強したい、となると負荷になるのではないか。見直しの理由に保育士の確保等が課題と掲げられているが、美術館での事例等を参照してもらいたい。(委員)

→ 事務局案で提示したのは、占有室として託児室という占有スペースは設けないという考え。美術館の事例も事務局では承知しており、例えば授乳室などを転用する中で託児を受け入れるなど、運用の方で解決していきたい。

- ・先ほど他の委員と話す中で、博物館でできないのであれば町としてやるという考えもあるように感じた。その辺も含めてご検討いただきたい。授乳の機会よりも、託児の方が要望は多いと思うので、あわせて検討いただきたい。(委員)

- ・見直し事項については了承とする。(委員)

#### イ 諸室に対する質疑・意見

- ・カフェを設置する場合防火・防水工事が必要となるので配置場所が限定されることもあり得る。文化財の公開展示に支障が無いように配慮されたい。(委員)

- ・市民交流室についても、資料の記載からすると防火等の措置が必要となる。効率的に進めるためにカフェなど他の防火壁を必要とする部屋との一体化も考慮すべきではないか。(委員)

- ・講堂には傾斜があった方が良くはないか。もし傾斜をつけた場合、可動壁が有効なのか。また、映像設備はソースが変わる可能性があるので、どの程度その点を想定するか、あらかじめ検討しておくべき。(委員)

⇒ 200名程度の収容であれば、この会場よりも若干広くなる程度で、勾配は必要ないと考える。平土間形式にすると記載したらいかがか。一般的には、300名以上の収容を考える時に、勾配を取ることが多い。

- ・防水への配慮から、交流学習室内に水道設備は設けるべき。(委員)

- ・受付については、人の流れが重ならないよう、受付と展示室入口のモギリは距離を取った方がよい。(委員)

- ・講堂の説明を例に挙げれば、事務局の記載は不十分。椅子については、ロールバック式というのは検討されているのか、1人1平米と考えれば200人で200㎡というのは理解できるがステージ部分をどうするのが記載されていない。脇舞台を造るのか、フライをつけるのか。

→ ロールバック式については考えていない。ステージについては検討していなかった。

- ・講堂がおそらくもっとも稼働率が低くなる。その際に、市民が参加できる博物館を目指すのであれば、市民に開放することを踏まえて考えるべきではないか。(委員)

⇒ 付近にはMウィングもある。博物館としての活用の仕方もいくつかの要素が必要。個人的にはシンプルで無理をしなくても使える形態が良いのではないか。

- ・Mウィングや美術館がどういうニーズを満たしているのか、潜在ニーズに対してはどうか、新たに整備される信毎本社ビルなど民間でもできてくるので、そういった部分の分析も必要ではないか。(委員)

- ・講堂の使い方として、年にそう何回もあるものでない「大規模な講演会やシンポジウム」が来ている点は考えないとならない。市民が日常的に使える空間が大切ではないか。「大規模な講演会に「も」使える」ならいいと思う。

どの施設でも規模イメージでつくって運用できていない。理想より現実的なことを考えないとならない。(委員)

- ・信州大学附属図書館の事例をみると、学生は小さなセミナー室の利用頻度が高い。市民が使うなら、大きい講堂よりも小さな部屋を多く用意した方が使いやすいのかもしれない。(委員)
- ・近年の公共施設の部屋は、互いに重なり合って使えるようにする例が多い。多目的ホールとしても使え、さらに壁を外すとロビーとも一緒になる。大勢が集まるイベントの時には、ロビーからカフェまで使えるようにするとか、そういう使い方を考えるかどうかが無いと、単に「オープンに」だけではどうしようもない。(委員)
- ・気安く入れる、利用できる、学べると考えると、市民が入りやすくなるカフェ、ミュージアムショップにしても、入りやすい配置が必要ではないか。(委員)
- ・ショップの関係では、展示で暮らしやものづくりがあったが、それらとショップと結びつくようなレイアウト、ストーリーが欲しい。また、博物館は歴史を学ぶだけでなく、子どもたちに伝える「継承」が大事だと思う。その中で、昔のものはいいものだけど、今のものは価値が無い、とは伝えてほしくない。今あるものもどんどん紹介してほしい。地方創生の中で松本ブランドの構築というのもあるので、工芸品やお菓子、新たな商品開発も含め、何かできないか、関係業界にも発破をかけてほしいが、いずれにしろ、市民もここに行けば何か買える、となればいいと思う。(委員)
- ・カフェについて、事務局から民業圧迫しないようにと説明があったが、行政が配慮しすぎて下り坂の街づくりになっている例が多い。機会の公平性を、プロポーザル方式の導入等により配慮すればいいのではないか。(委員)
- ・松本まるごと博物館が基本に考えたとき、博物館だけをみて満足するよりも、かえって不満を感じて松本のまちに繰り出す、たとえばミュージアムショップを見て、実際の店舗に足を向けたいと思わせる、それにより松本まるごと博物館がというのが達成できるのではないか。(委員)

#### ウ 事務局案として提出したサービス全体に関する意見

- ・サービスに関する討議だが、空間を造る＝サービスという考えから資料が創られているように感じる。託児室を造ることと託児サービスをすることは別。部屋ありきではなく、こういうサービスをする、それをだれが担うのか。そこを話さないと空間構成にならないのではないか。前回も同様に指摘したが、具体的なサービスの中身をわかりやすく示してほしい。市民はそこが見えなくて戸惑っているということも、ワークショップで見えた。(複数委員)
- ・挙げられているサービスの諸室のすべてを否定することではないが、事務局案で提出されたものはどこにでもあるものを並べたように思う。市民のために必要な順番を考えなければならない。次回には用途と重要性にしたがって並べ替えて再提案を求めたい。(委員)

- ・ソフト面のサービスの姿が見えてこないし、記載がない。

本来のサービスの基底にあるのは、学芸員がどのような対応をするのか。それが大切。(複数委員)

- ・地元ワークショップの成果を拝見する中で、大事なのは市民が現状に対する問題点を語っている。ここが一番大切。「博物館に行ったことが無い」「何をやっているかわからない」「暗い」、こうした部分に応じて、どうするかを決めなければならない、それが市民に対するサービス。

市民のニーズに対して、どうとらえ、提供するか段階的に落とし込む、その最後が施設であるはず。博物館で部屋を使うのが目的なのかと問われるかもしれないが、市民同士が博物館の場を使って学ぶために使うのであれば良いのではないか。博物館はものすごく間口が広いものにとらえてもいいのではないか。(委員)

- ・事務局では、講堂などの部屋を使う場合に、入館料は取るつもりで考えているのか。(委員)

→ 講堂や交流学习室の利用のみの場合、入館料を徴収する考えは持っていなかった。また、市民への貸し出しについては、交流学习室ではそのような用途も考えられるとは思っていたが、それ以外の部分ではまだ検討をしていない。

- ・稼働率の話が先ほどあったが、担い手の問題とも不可分だと考える。空間をどう満たすのかという視点以外に、その中の時間をどう満たすかが欠けている。学芸員が担い手の第一になるわけで、学芸員がどうしたいのか。市民がわくわくするためには、まず学芸員がわくわくしなければいけない。そうした部分は事務局で深めていただくほかはない。(委員)

- ・今現在何人の学芸員がいるのか。(委員)

→ 今の体制では、事業担当に正規4名、嘱託1名。館長は除いている。

- ・新博物館では学芸員を増やすのか。

→ 面積も大きくなることを考えると、現状では職員が足りない。一方で行政改革があるので、職員体制をどうするか検討している最中で、申し上げられない。

- ・サービスの部分で人的に負うところもあるかもしれないが、機械機器に頼る部分があっても良いのではないか。(委員)

- ・第1回の収蔵、第2回の展示、今議論になっているサービスも含め、学芸員がどうかかわるのか、それがあからこの部屋が必要、となるのだと思う。次回に学芸員の方から、こういうサービスが良いのではないか、と示していただければと思う。(委員)

- ・講堂にせよ市民交流室にせよ、気軽に入れるようにするためには次回の建設の中でも検討する必要がある。(委員)

- ・ソフト面のサービスでいえば、展示や説明を学芸員、あるいは市民学芸員が担ってほしい。そういった人を育てるという場も必要となるはず。また、外国語表記も必須になるが、英語が堪能な市民ボランティアに対し、学芸部門での研修も必要ではないか。

博物館のサービスの根底にあるのは、「伝えたい」という意図だと思う。学芸員がきちんとしていないのであれば、それは博物館でなく図書館で良いとなる。伝える仲間を増やすことが大事なのではないか。

地元ワークショップでも、若い担い手をふやしてほしいと出ている。(複数委員)

- ・基本計画でもビジョンは示されているが、ワークショップの成果を踏まえ、これまでの博物館でどういうところが市民にとって問題だったのか、それを受けて学芸員がこうしていこうという夢・ビジョンを示すことが必要になる。その上でサービスを具体化していくことを考え、具体的に施設のこと、その規模・構造に落とし込んでほしい。(複数委員)

#### エ 全体に対する意見

- ・今までの委員会での議論をふまえ、資料2-3の対象について、「市民を対象とし、結果として観客等松本市への来訪者の要望に応えられることを目指す」とすべきではないか。(委員)
  - ・正面玄関をどこへ持っていくのかも大切なこと。屋外展示や広場の回遊など、これを考えないと建物ができても廻りとそぐわない、松本城を売りにしているのに浮いてしまう。松本の景観をどうするかについて大事な機会だと考える。(委員)
- ⇒街なかから松本城天守への視線は大事にしてもらいたい。
- ⇒自然に囲まれたすばらしい場所ではあるが、いざ市街地に入ってみると緑が少ない。湧水もあるので、建物全部で埋めてしまうのではなく、緑と湧水は欲しい。
- ・イオンモールができる中で、東側のにぎわいと街なかのにぎわいの両者を考えなければならない。その中で、建物のデザインや真ん中に何を置くかが、影響がある。(委員)
  - ・常設展示がどれだけのものになっているかが博物館の最大のサービスで、そこから現物を見に行く、本物を見たいと思わせるような展示がしたい。市民が本物に、美ヶ原や上高地に行きたくなるようにしたい。松本の人たち全体が動かないと、観光客が動くわけもない。そういうところから考えないといけないのではないか。(委員)
  - ・博物館はもの、資料が基本的な資源となるが、市民も一人ひとりの生き方・キャリアを持つという意味で、有形ではないが無形の資料になる。松本まるごと博物館も、それを担う市民学芸員だけでなく、それ以外の市民も担い手になってもらう。その考えの中で市民参加というのもし出てくるし、そういう人たちが使いやすい博物館がいいのではないか。博物館の資源にもなりうる形で、色々な人に登場していただく仕掛けを考えていくと、幅広い博物館活動ができるし、市民の期待も高まる。

その際に接点になるのが学芸員。市民と接点のある学芸員がいかに街場に出ていくかが大切ではないか。(複数委員)

- ⇒ 一方で、現実の博物館の職員としては、相当人数を増やさなくてはならない。片や研究に励むように言われ、もう一方では今までと違うこともしなければならぬ。一つひとつのところはもっともなことではあるが、細部の所ではきちんと切っていく必要もあるのではないか。
- ・埋蔵文化財に対するスタンスについても示してほしい。発掘調査により遺構が出てきた場合に、博物館としてはどのように対応する考えなのか。(委員)